

石見焼工場の調査報告(1)

—建造物調査—

榎原博英・國分俊幸

はじめに

島根県古代文化センターでは、考古基礎資料調査研究 生産遺跡調査（近世近代在地陶磁器調査）として、令和4～6年度まで、石見焼の窯元である吉田製陶所（浜田市上府町口774）の調査を実施している。この調査のねらいは、同製陶所は現在操業中の窯では最古級の昭和28（1953）年創業、工場建物は約140年前の明治10年代と伝わり、遺跡調査と比較検討する基礎資料とすることである。本稿では建造物調査の概要を報告し、道具類については稿を改めて報告する。

石見焼は18世紀末～19世紀以降に現在の島根県西部（石見地域）で生産された陶器主体の焼物である。その窯跡は埋蔵文化財として発掘調査されており、現存する建物群、製作道具等と発掘調査結果を比較することができる。このため、現在に続く石見焼の記録作成も重要で、ひいては近現代以前の窯業、特に壺・甕・鉢類の製作技術の参考にすることができる。

工場内の乾燥小屋・ろくろ工場・作業場の個別建物図面、周辺の登窯等の施設も含めた全体配置図は、いわみデザイン工房（所長 國分俊幸）に作成委託した成果を用いている。建物名称は聞き取りをもとに執筆者で性格を勘案して決定したものである。

今回の調査では、現在も作陶を続ける吉田製陶所の吉田好幸、吉田美和子、吉田傳次の各氏に調査へのご快諾を頂き、多くの情報、ご配慮をいただいた。また、令和4・5年度調査担当の東森晋（古代出雲歴史博物館）・藤田大輔（浜田市教育委員会）の各氏から、多くの助言と協力をいただいた。

1 吉田製陶所の概要

旧浜田市には106の窯業遺跡があり、吉田製陶所のある上府町では30確認されている（島根県古代文化センター他2016）。陶土が採取できる地域のため、周辺も含めた浜田市東部から江津市西部には窯業遺跡が多い。

『石見粗陶器史考』（平田1979）には、吉田製陶所について、以下の記述がある。

「吉田製陶所 現当主吉田弥三郎によって、昭和28（1953）年に従来あった古い丸物窯を買い取って丸物窯をひらいた。丸物は5斗入り以下のものを主体として、その外に一夜漬け、傘立など少品種の民芸陶器を作っている。登り窯は11室1棟があるが、現在はガスガマを使用している。」

また、同書によると昭和53（1978）年10月の吉田製陶所の従業員数は8人である。

聞き取りによると、窯は吉田氏と佐々木氏（荒相・屋号 中部屋）の共同窯から始まり、のちに吉田氏の経営となったという。現在の水簸施設北側と登窯との間には広い平坦地があり、現在も粘土を採っている。昭和49（1974）年頃の航空写真には登窯南側に建物があり、共同経営者の工場建物の可能性がある。図3でろくろ工場跡として点線表記している。窯印は、吉田本家の窯（江津市波子町・吉田窯跡）がΛの下に「ヨ」を用い、分家の当工場は○内に「ヨ」とした。窯印は主に一等品につけており、実物は確認できなかった。（榎原）

2 建物の概要 (図4～11)

建造物調査は、既地形図の建物配置をもとに、山林内の登窯の略測、建物の詳細調査により、新たに全体配置図(図2)を作成した。屋根伏図(図3)では、航空写真等を参考に、現存しない建物(登窯瓦屋根、ろくろ工場跡)を点線表記している。間数の表示は、1間を約1.98mとしている。

各建物の屋根に葺かれた石州瓦は典型的な赤褐色から黒褐色、黒色に近いものまで、釉の発色にむらが多い。聞き取りでは、質の悪い瓦は安く関係者に販売していたようで、そうした周辺の安い瓦を用いて葺き替えも行っていたと考えられる。ろくろ工場は二階屋根の痛みがひどく、乾燥小屋は屋根崩落のため、令和6(2024)年初頭に解体された。使用材においては、特に作業場での柱梁の痕跡にかなり不明な点が多くみられ、古材を使用した事も考えられる。一方、丸太を使った軸組や小屋組み等、全て地産地消で行っていたことがうかがえ、昔の和組の原点を垣間見ることができる貴重な建物群と考えられる。

2-1 ろくろ工場 (図4～6)

(1) 形式と構造

形式 木造二階建、切妻造平入、石州瓦棧瓦葺き、一部木造平屋建、波板トタン葺

大きさ・寸法

建築面積292.92㎡

一階 212.85㎡ (東西20.58m×南北12.74m)

二階 80.67㎡ (東西13.72m×南北5.88m)

建物は7間×3間の2階建ての土蔵造りで、作業場2面に1.5間の底のついた外部乾燥場、2間×1間のろくろ作業場、4間×2間の粘土場がついた切妻造、石州瓦棧瓦葺きの工場である。土間は室内及び底部分は三和土、二階は荒板張りで物置となっており、隅に2間×1間の吹抜けと、底部から二階に直接物を出し入れ出来る様に開口部が4ヵ所設けられている。ろくろ場は約1間×4間で高さ60cmの荒板張りの作業台があり、開口部を背に4台のろくろ作業スペースがある。その上部に2本の竹の上に荒板を乗せる乾燥棚があり、一階乾燥場1と2、外部乾燥場1と2にも同様の装置が設けられている。また粘土場の4間×2間は腰がコンクリートブロック積に改修されている。

構造は、二階建て部分の四隅と中央2本は8寸の丸太の通し柱で、二階床組は桁行に9寸の梁を2間ごとに1尺の牛梁で受け、小梁は6寸半割りが半間ごとに入り荒板を受けている。階高は大型建物の為低く押しえられている。屋根勾配は上屋が6寸勾配、底部は4寸勾配と上屋に比べ底部が緩やかな勾配となっている。

小屋組みは、桁行に2間と3間の継ぎ梁1尺を通し、1間ごとに6寸の合掌梁と8寸の梁を設け、その上に8寸の梁受け梁と桁行継ぎ梁1尺1寸の3段構造となっており、その上に7寸の棟木が乗る構造となっている。底部は1間ごとに4寸柱を立て、母屋とも5寸で2寸の垂木が乗る。

屋根は1間につき6本、2寸の垂木に割竹を敷き、茅を敷いた上に棧瓦を土葺きしている。

1階は10.5間×6.5間、2階は7間×3間と、大きな空間を確保するための軸組と小屋組み構造で、窯業製作の為の作業を効率的に行うための建築形態がよく残されている建物である。ただ同敷地内の乾燥場等に比べてかなり痛みが激しく、改修が行われている。特に二階西面は桁部分に亀裂が入り屋根も一部拭き替えられている。

(國分)

(2) 特徴と評価

主屋となる柱間数が2×4間の2階建て切妻建物の1階部分の西面と北側一部をL字状に1間ずつ拡張し、寄棟屋根を設けた平面形である。内部配置は、主屋部分が乾燥場、1階北側奥に粘土場があり、西側の明るい窓際

にろくろ作業場がある。ろくろ座は4台あるが、現在は1台のベルト式電動ろくろを中心に行っている。ろくろ作業場周囲の柱や壁、戸板には連絡先、製品サイズ等が直接メモしてある。西側外壁、ろくろ作業場の背面には、中型甕（はんど）が横方向に壁に穴をあけて埋め込んである。これは、ろくろの横で長い棚板の反対側を壁面外に突き出し、棚板先端から作った製品を並べやすくするために継ぎ足したものである。各ろくろの足元には、小型甕が計3個残っており、杓子、コテ、ヘラ類が入っていた。ろくろの数に対応し、かつての職人一人の使用セットを想定させる。ろくろ作業場の前には三和土床を窪めた火床があり、北側には製作時に出る粘土削屑の集積、ろくろに載せる粘土柱を練り出す小型土練機がある。ろくろ成形した製品は、職人が棚板に載せ、荒仕古（職人以外の作業員）が運び、乾燥場、外部乾燥場の釣棚と床に並べて乾かす。2階物置は、南壁に扉があり、1階外部乾燥場から物を上下に運ぶことはできるが、室外の階段、1階吹抜けから梯子で垂直に上がるといった人のアクセスはあまりよくない。現状でも使わなくなった蹴ろくろ、製品の一部分が置かれており、2階は頻繁に物を出し入れする空間ではなかったようである。

工場東側は1、2階ともに天井に大梁を渡して床面からの通柱を減らし、1階乾燥場と2階物置は中柱が少ない構造になる。柱が少ないため、製品を載せた棚板の取り回しが行いやすい。釉薬甕は屋根付きの外部乾燥場に置いてあり、施釉は外部乾燥場と屋外作業場で行われている。施釉後、主に中小型品は2階建ての乾燥小屋に運ばれ、ストックも兼ねて登窯での焼成まで保管されていた。

一部補修も行われているが、敷地内で最も大きな建物で造りもしっかりしている。三和土床の凹凸、火床による室内の煤けなど、当初から現在まで使われ続けている伝統的な工場の様相を残す建物である。（榊原）

2-2 乾燥小屋（図7、8）

(1) 形式と構造

形式 木造二階建、切妻造平入、石州瓦棧瓦葺き、一部木造平屋建、波板トタン葺

大きさ・寸法

建築面積65.30㎡（東西11.22m×南北5.82m）

敷地南側、斜面を背にした旧登窯の右手に位置する。間口4間×奥行1.5間の二階建の間口側に1.5間の葺き降ろしの庇がついた切妻造、棧瓦葺きの乾燥小屋である。右横に間口1.5間×奥行3間の平屋建、切妻造、波トタン葺きの作業場が付属する。

母屋部分は真壁で荒壁仕上の素朴な仕上げとなっており、平屋の作業場は外壁面に割竹を建て張りし、通風を考慮した造りとなっている。一階底部は1間ごとに5本の柱で両側にそれぞれ中柱を設けた開放的で広い作業空間を確保している。床は一階が三和土で二階は荒板張り、出入口は北正面に1ヶ所、東側面に1ヶ所、南裏面に2ヶ所あり、二階とは可動の梯子で正面入口上と南側面の2ヶ所で昇り降りができる。南裏面出入口は登り窯への通路のためと考えられる。二階は北正面に3ヶ所、南裏面に1ヶ所の開口部と、腰壁のついた窓が両側面と裏面の3ヶ所にある。

また、一階北正面と南裏面にそれぞれ5ヶ所、西側面に3ヶ所、二階は南裏面に5ヶ所の床上に40cmの通風窓がある。乾燥のための通風を配慮し、格子の代わりに荒壁下地の小舞組の縦竹を利用した大変素朴な造りである。柱は半間ごとに丸太組で下端4.5寸上端4寸の通し柱を、4寸の桁と10cm×2cmの4段の貫でつないでいる。二階床梁は柱ごとに5寸の丸太を、ほぞ組で固め、その間1本ずつ2.5寸の小梁を貫に渡し厚さ5分の荒板を載せている。

小屋組みは、4寸の軒桁と、中央2間目に4寸の小屋梁を掛け、桁側4間の梁持梁5寸末口丸太を受け、3寸の束で1間ごとに5寸の棟木を受ける簡素な構造となっている。屋根は1間につき5本の2.3寸末口の丸太の垂木に割竹を敷き、茅を敷いた上に棧瓦を土葺きしている。

調査時には全体的に痛みがひどく、屋根が落ち、建物全体が西側に大きく傾き、いつ倒壊してもおかしくない状況となっており、令和6年初頭に解体された。間取りでは、建物2階は窯焚きの際、寝泊まり、休憩所としても使われていた。また、平屋の作業場は、柱梁がほとんど古材であるが、小屋組みが半分新しく葺き替えられており、以前屋根があったかどうか、その葺き材についても不明である。 (國分)

(2) 特徴と評価

この建物は、主屋の2階建切妻建物と北側に連続する庇状の屋外部分と西側に切妻屋根のみの屋外部分がある。主屋は礎石を等間隔に用いず、上の土台木材と柱組で柱間3×8間の小屋組みを作っている。中型甕（はんど）など小屋に入れにくい大きめの製品は、屋根付きの屋外にも置いたと考えられる。壁面下部に土壁を造らず木舞が露出している部分があり、通風孔と考えられる。乾燥場の2階からは崖面上の登窯の2～3室あたりにショートカットできる通路があり、特に中小型品の運搬に適している。一方、中型甕（はんど）など外部乾燥場、乾燥小屋の壁側に置いた大きめの製品は、登窯横の階段を使って運んだと考えられる。倒壊前の乾燥小屋には、未焼成品と焼成後の製品が混在して置かれており、ガス窯期には倉庫になっていたと考えられる。 (榊原)

2-3 作業場 (図9、10)

(1) 形式と構造

形式 木造平屋建、切妻造平入、石州瓦棧瓦葺き 増築部、波板トタン葺

大きさ・寸法

建築面積 96.71㎡

一階 96.71㎡ (東西5.93m×南北16.31m)

作業場はろくろ工場に隣接する7間×3間の平屋階建ての乾燥場に、2間×4間の増築部分の平入切妻造、石州瓦棧葺きの建物である。製品出荷作業や、窯入前の乾燥を行う建物で、現在も同じ用途で使われている。

壁は荒土仕上で、増築部がトタン貼りの簡素な建物で、土間は室内及び増築部分は三和土となっている。柱は石建てで、外部につながる建物左右の上部に2本の丸太の上に荒板を乗せる乾燥棚がある。大きな空間を12mのほぼ中ほどの5寸柱1本で小屋を支えている。

西側（ろくろ工場）側に1間半の開口部があり、主にここから製品の搬入搬出が行われていた。東面はガス窯棟との関係で3ヶ所の大きな開口部となっており、両側に一間ずつの壁がある。柱は半間ごとに4寸で石建の角材と丸太が混在し、軒高は2.45mで少し低く押さえられている。小屋組みは桁行に3間と2間の継ぎ梁7寸を通し、1間ごとに8寸のたいこ梁を設け、京呂組と折置組が混在する。屋根は1間につき6本の2寸の垂木に割竹を敷き、茅を敷いた上に棧瓦を土葺きしている。3間飛ばしの小屋組みを支えるため、中央の梁は8寸のたいこ梁2本で挟み込んだ構造となっている。ただし柱や桁には多数のほぞ穴や壁の痕跡があり、間仕切り貫等が改造されたのか、別の建物から転用したのかは不明である。 (國分)

(2) 特徴と評価

当初は柱間3×5間の切妻建物で、北側に休憩室などを増築している。さらに東のガス窯場、西側の屋外作業場と屋根を共有させて連続した広い作業空間を確保している。中柱を減らして製品を取り回しやすくしている点は、ろくろ工場と同様である。中柱を減らした分、4本の横梁、3本の縦梁で上屋を支えている。

窯で焼かれた焼成後の製品は選り分けられ、不良品は物原へ廃棄される。最後に作業場(図9)を中心に焼台などによる溶着痕を外す仕上げ、検査確認、出荷のための梱包が行われた。この作業場には事務机、製品棚も置かれており、事務、展示場所も兼ねている。

3 他施設の概要 (図 2、3)

敷地南東側の山林中に残る連房式登窯は、昭和51年にガス窯に代わるまで使われていた。最下段の焚口と11室、小型の房（フカセ）をつけた煙出からなる。窯は崖が崩れて焚口と数部屋が破損し、ガス窯に代わっている。崖面に窯断面が見える。全長は約31m・幅6～7.5m、下から向かって右手に房入口と階段がつく。作業時は瓦屋根（図3点線）で覆われており、当時の航空写真で確認できる。煙出は煙突ではなく、トンバリ（レンガ）で組んだ格子穴から排煙する。各部屋内には焼台や製品が残っているが、原位置のものはほとんどない。不良品を廃棄した物原は、登窯より南側の高所に確認できる。

登窯は、中規模の陶器窯3類（榊原2017）で、浜田市東部から江津市にかけて最も多く分布し、石見焼登窯の典型的なイメージの規模である。陶器窯3類は、江戸時代にはなく明治に出現、大正期に最も多い。発掘調査が行われた類例は、長東坊師窯跡（島根県教育委員会2001）、上府八反原窯跡（島根県教育委員会2001）があり、いずれも吉田製陶所と同じ浜田市東部で、規模、生產品とも類似する。

敷地南西側には、鉄骨組の覆屋の中に粘土置場、土漉し場、水簸施設、粘土精製場等の陶土をつくる施設がある。伝統的な方法では、水簸した粘土は素焼きの盛鉢に載せ、棚に並べて自然乾燥させていた。現在は、機械化により精製は圧搾機で行い、広く他の窯元にも陶土を販売している。現在は作陶と陶土販売を併行させており、陶土作成は、本来の規模より拡大している。昭和51（1976）年頃に登窯からガス窯に代わったが、この粘土関連施設も同時期に整備されている。

なお、江津市の本田窯跡では、伝統的な盛鉢や棚、溜枡を用いた水簸施設の調査が行われている（島根県教育委員会2024）。

4 おわりに

吉田製陶所全体の変遷は、昭和28（1953）年以降、古い窯を買い取って生産経営を始めた登窯期(A)、昭和51（1976）年以降、現在に至るガス窯期(B)に分けられる（図11）。規模等からみて、元々の窯や建物は、江戸時代には遡らず明治～大正期のものであろう。窯の変化と粘土精製場の整備は同時期で、現在では他所への陶土販売も経営の柱になっている。

4-1 登窯期

A1ろくろ工場、A2乾燥小屋、A3登窯、A4作業場、出荷と作業導線がある。聞き取りや航空写真から当初は一つの登窯を2つの工場で共同使用した可能性がある。谷間の平地に工場と作業場、斜面に登窯を造り、比較的広く土地を利用している。他の窯では利用できる土地に制限があったようで、登窯の最後尾を盛土の上に築く例（長東坊窯跡・島根県教育委員会2001）、谷間斜面に作業場を造る例などがある。

ろくろ工場内の導線（図11）は、①粘土場、②ろくろ作業場、③乾燥、④施釉となる。土練りは土練機、蹴ろくろが電動ろくろと、一部機械が導入されているが、次のガス窯期でも導線は変化していない。

乾燥小屋（図7、8）は、2階から崖上の登窯横の階段と房へショートカットできる位置に建てられている（図2、3）。昭和9（1934）年頃創業の浜田市平野窯跡（浜田市教育委員会2006）などでは、登窯に隣接して2階建ての工場を建て、1階で作陶、2階から直接登窯まで運べる例がある。吉田製陶所の建物群（明治期）より後出で、さらに効率化が進んだ配置である。平野窯跡では、すり鉢、ふたつぼ、タイルなど生產品目を絞った中小型品を作っており、運搬距離の短縮など大幅な効率化を図っている。

4-2 ガス窯期

B1ろくろ工場、B2屋外作業場、B3ガス窯場、B4作業場、出荷と変化している。その変遷過程で、破損した登

窯の焚口部を平坦にして作業場（鉄骨造）を増築し、屋外作業場（鉄骨造）を、ろくろ工場の屋根、作業場の屋根と継ぎ合わせて広い屋外作業場を設けている。ガス窯期には屋根のある空間を増やし、作業と置場の確保、各製品の移動の効率化をはかっている。

登窯期からガス窯期への変遷の中で、鉄骨組建物が建てられ、ガス窯場（図10）、屋外作業場、粘土関連施設が該当する。東側谷奥を整地し、作業場に隣接してガス窯場が作られている。ガス窯場は、窯に詰めるための台車、積み下ろしのための作業空間がある。ガス窯場内の空間に加え、ろくろ工場の外部乾燥場と屋根をつなげた屋外作業場もあり、屋根付きの連続した作業空間を確保している。これにより登窯への斜面移動がなくなり、製品の移動は大幅に効率化されている。

4-3 まとめ

石見焼は、明治時代末以降は窯元が増加して窯も大型化し、大正期がピークとなる。昭和期以降には負担減、効率化を目指し、窯の小型化や工場配置等の変化が始まったと考えられる。この最たる変化が、ガス窯の導入で、建物配置と導線は大きく変化する。窯跡の発掘調査では、遺構として登窯跡、建物跡（掘立柱・礎石・布石）が確認できることが多い。今回、調査を実施した建物群は、ろくろ作業場部分のみが高床、あとは基本的に土間である。このため、礎石間に布石・木材の土台を置き、柱を立てて壁を支えるものが多く、いわゆる床建物とは異なる。全体の建物配置だけでなく、三和土床、火床、ろくろピットなどの建物内の状況、瓦葺き、礎石・布石と土台木材からの建物構造、発掘調査では判らない上屋の小屋根構造など、参考補足できる情報を多く記録することができた。

（榊原）

参考文献

- 発掘調査報告書類は、全国遺跡報告総覧 (<http://sitereports.nabunken.go.jp/>) からPDFを利用できる。
- 榊原博英2017「石見焼の窯道具と登窯について」『近世・近代の石見焼の研究』島根県古代文化センター
- 榊原博英2018「近世後半から近代の石見焼」『中近世陶磁器の考古学』第8巻 雄山閣
- 榊原博英2022「石見焼」『関西近世考古学研究 28』関西近世考古学研究会
- 島根県教育委員会2001『石見焼関連遺跡調査報告1（飯田A遺跡・長東坊師窯跡） 一般国道9号線江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V』
- 島根県教育委員会2001『石見焼関連遺跡調査報告2 上府八反原窯跡（佐々木窯跡） 一般国道9号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書VI』
- 島根県教育委員会2024『本田窯跡・千本崎城跡』
- 島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター2016『在地陶磁器集成1（石見部陶器編）』
- 島根県古代文化センター2017『近世・近代の石見焼の研究』
- 島根県立古代出雲歴史博物館2016『企画展 いわみもの-暮らしを形づくる石見のやきもの』
- 浜田市教育委員会2005『平野窯跡』
- 平田正典1979『石見粗陶器史考』石見地方史研究会

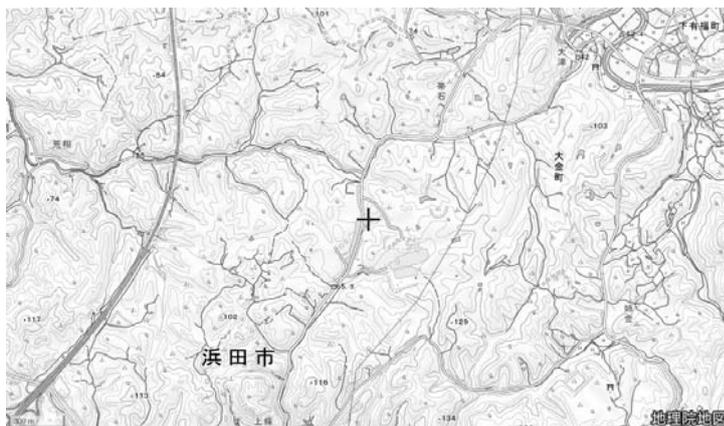


図1 吉田製陶所位置図 (+)
地理院地図（電子国土Web）より作成

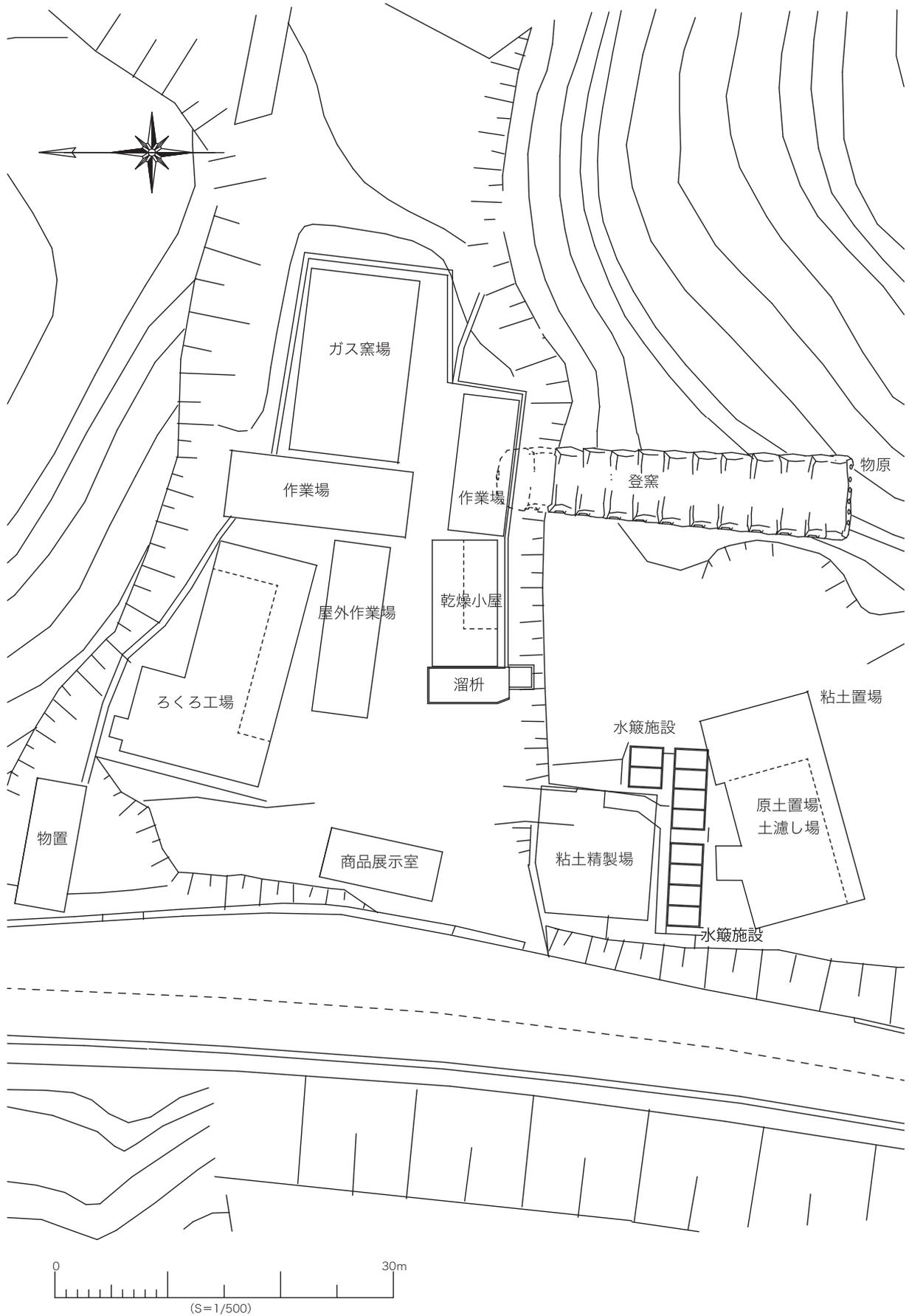


図2 吉田製陶所配置図 S=1/500

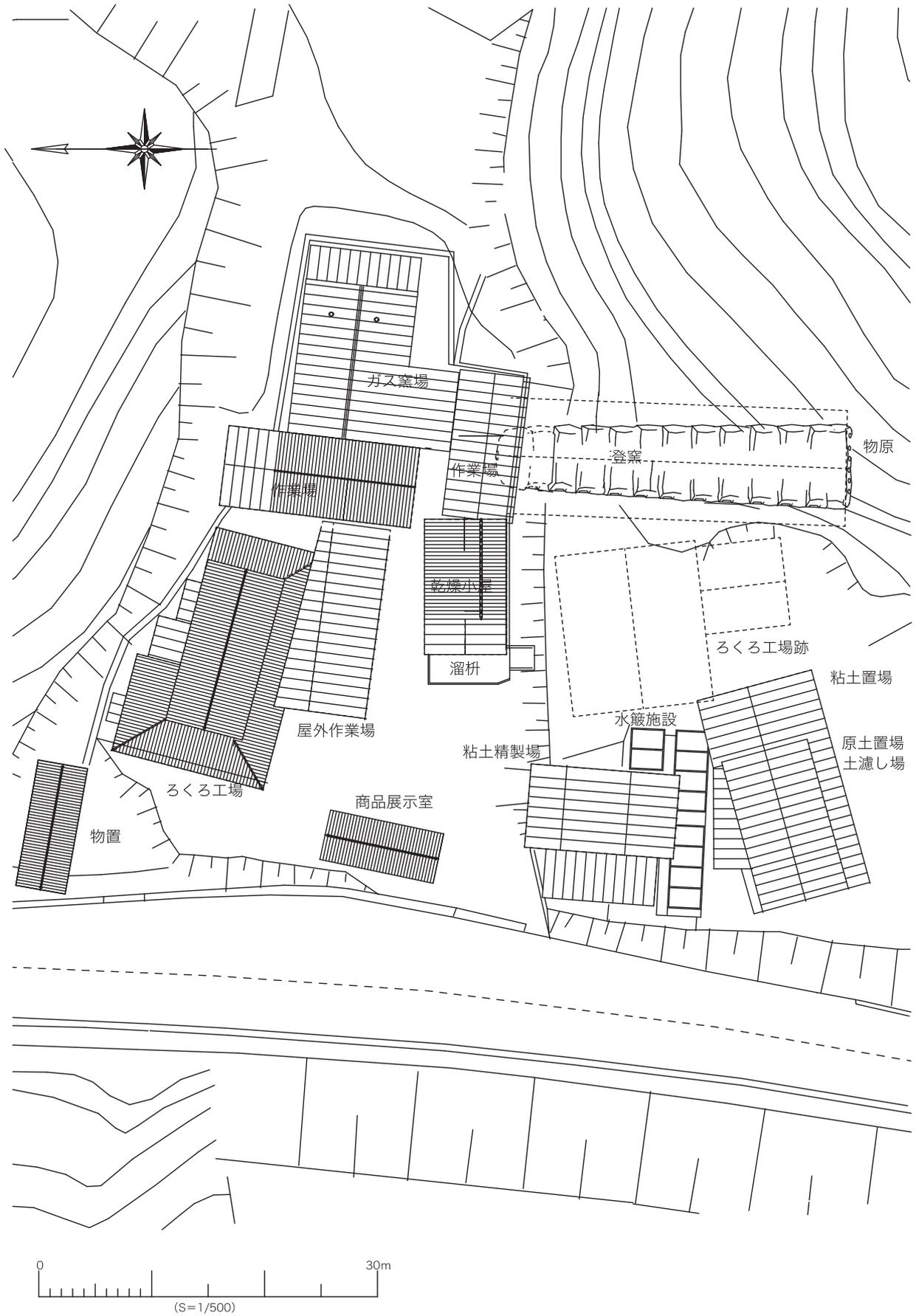


図3 吉田製陶所 屋根伏図 S=1/500

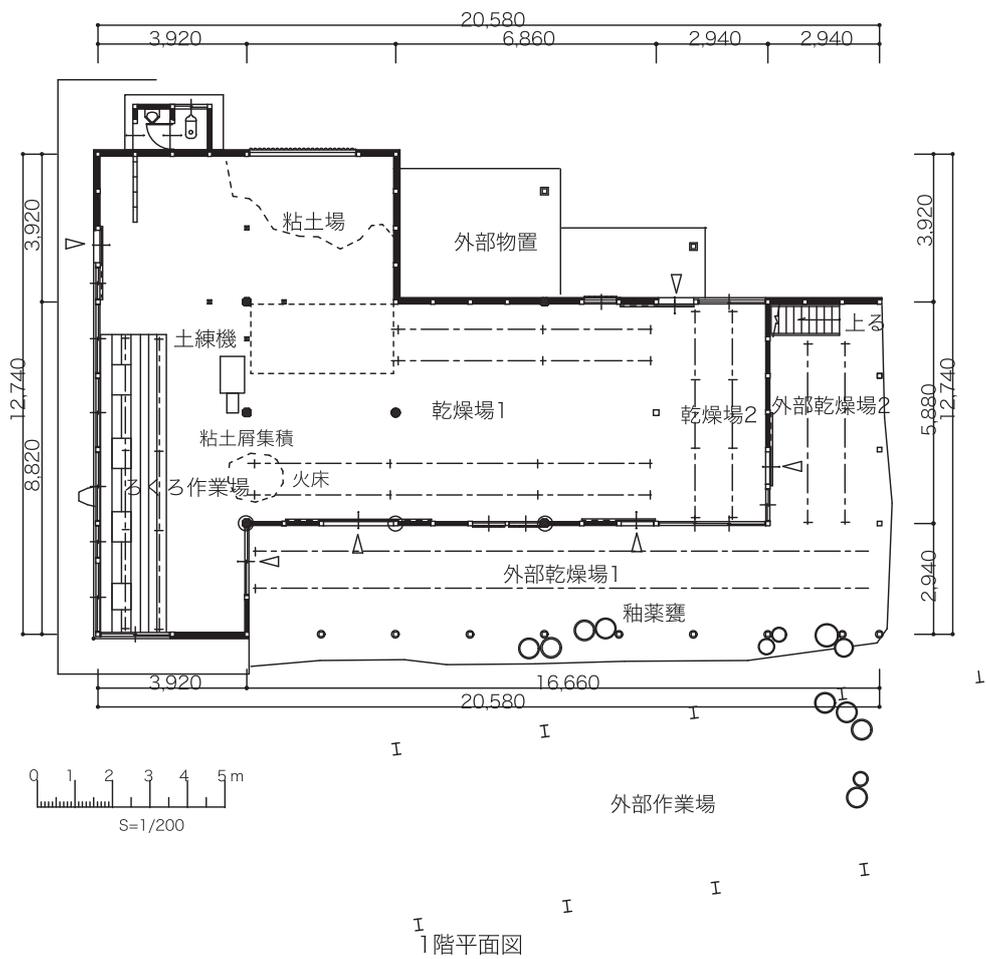
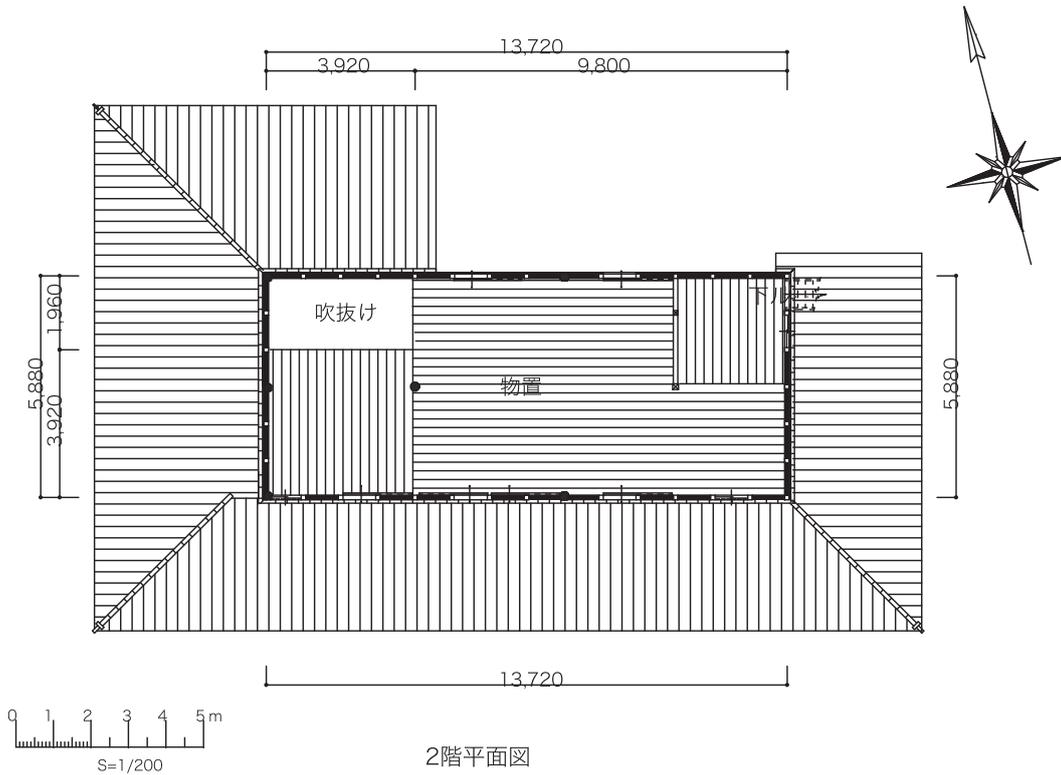
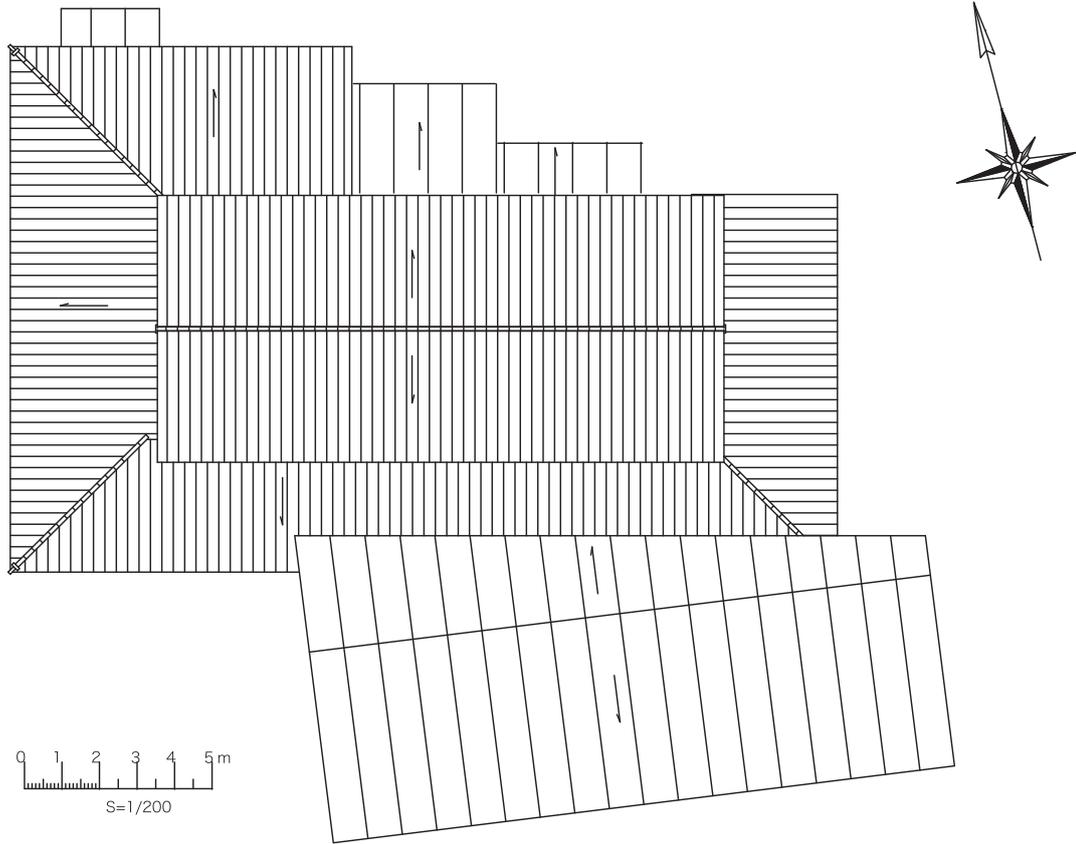
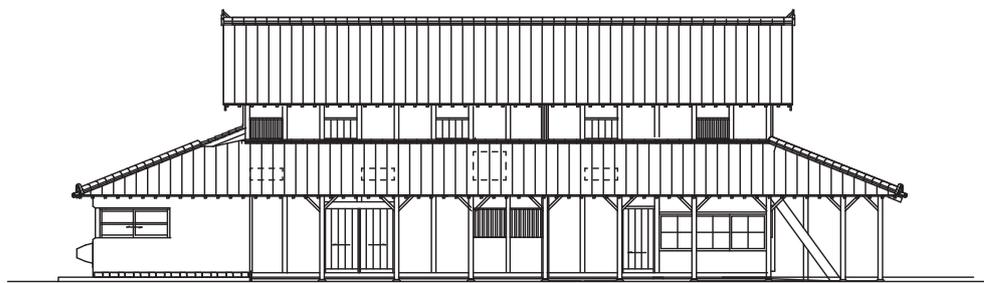


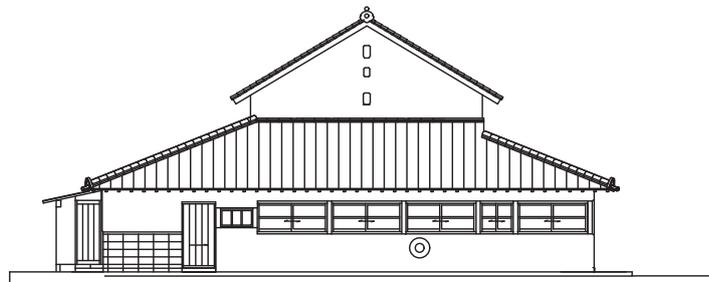
図4 ろくろ工場(1) S=1/200



2階屋根伏図



南立面図



西立面図

図5 ろくろ工場(2) S=1/200

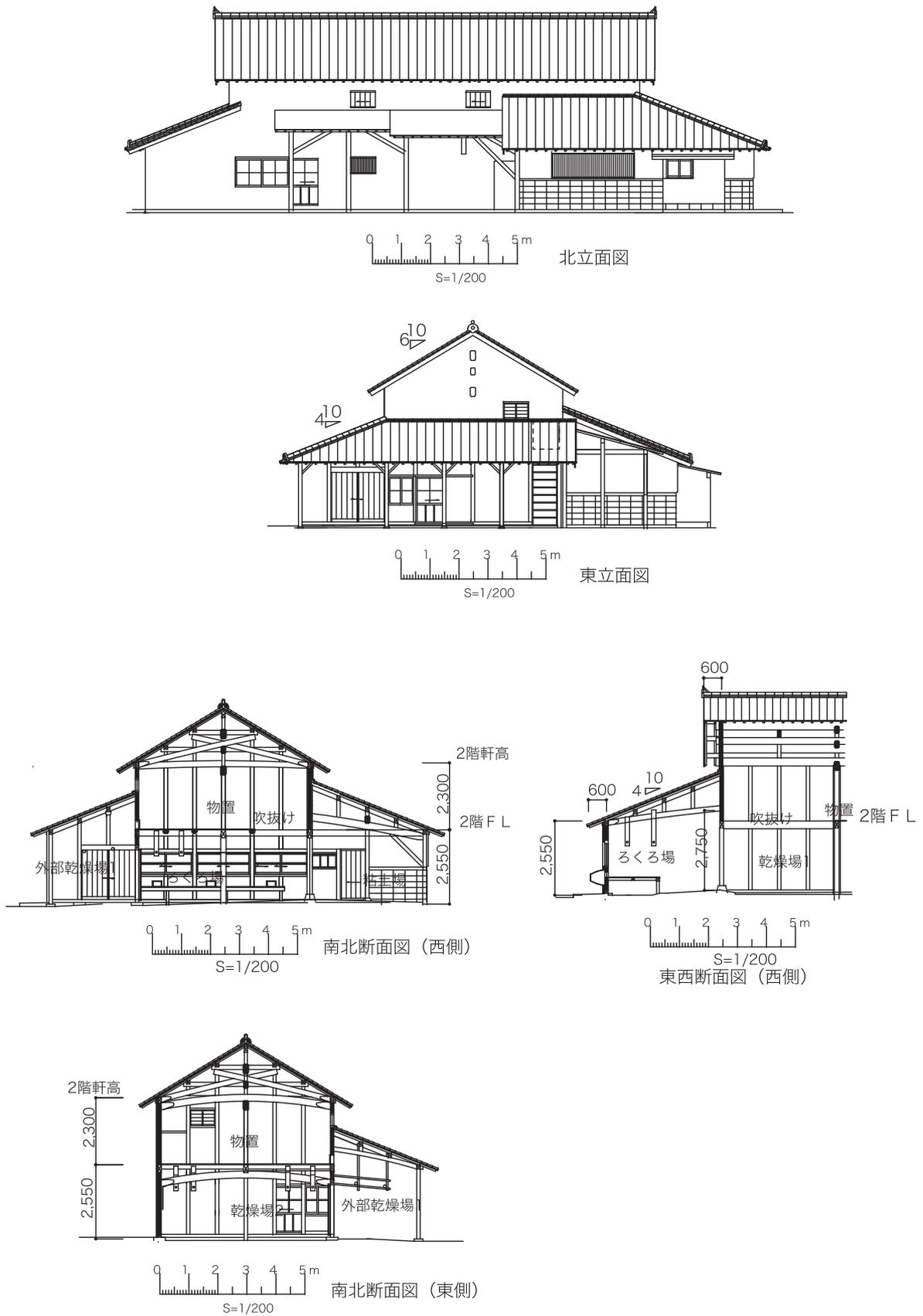


図6 ろくろ工場(3) S=1/200

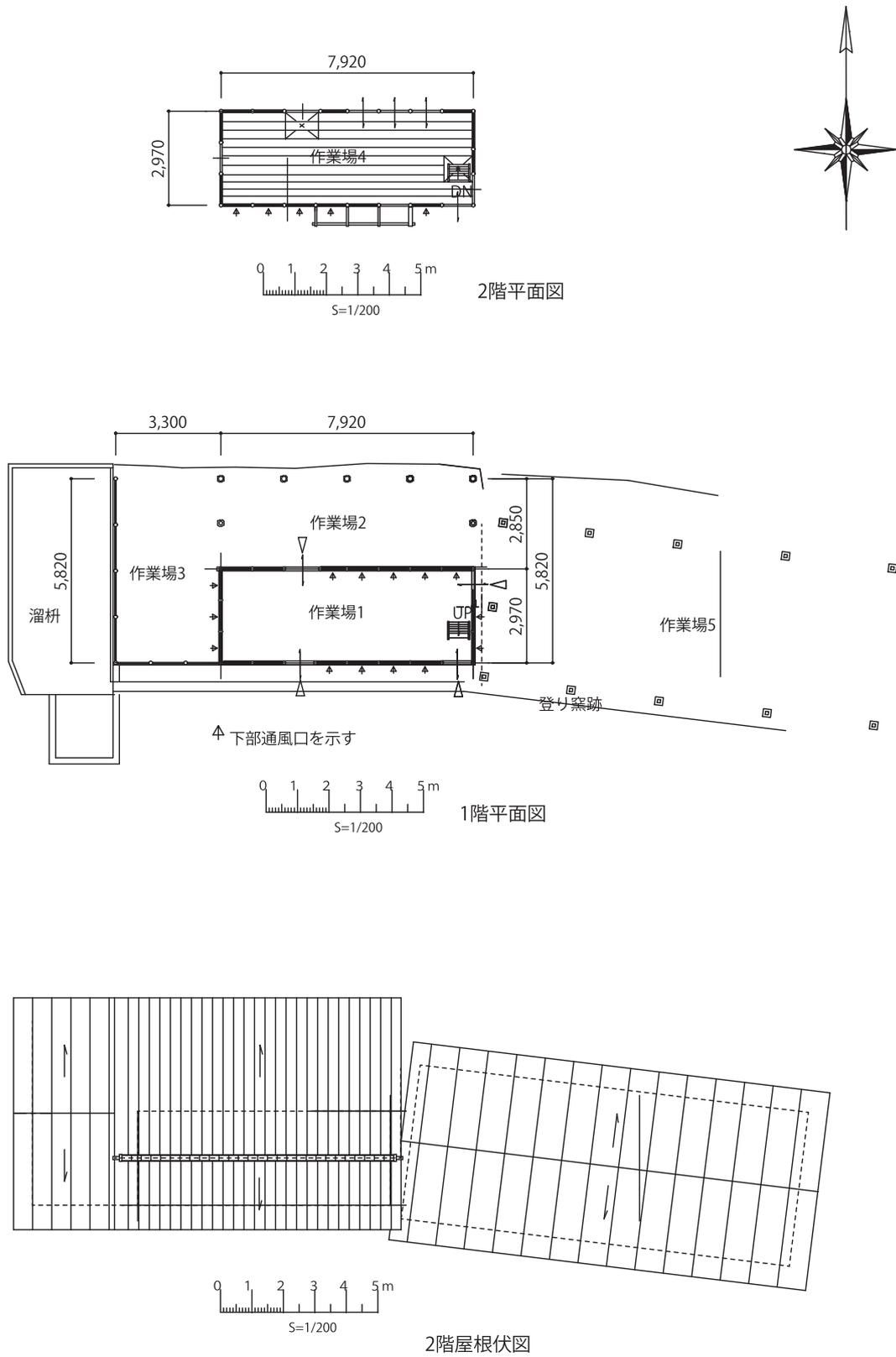


図7 乾燥小屋(1) S=1/200

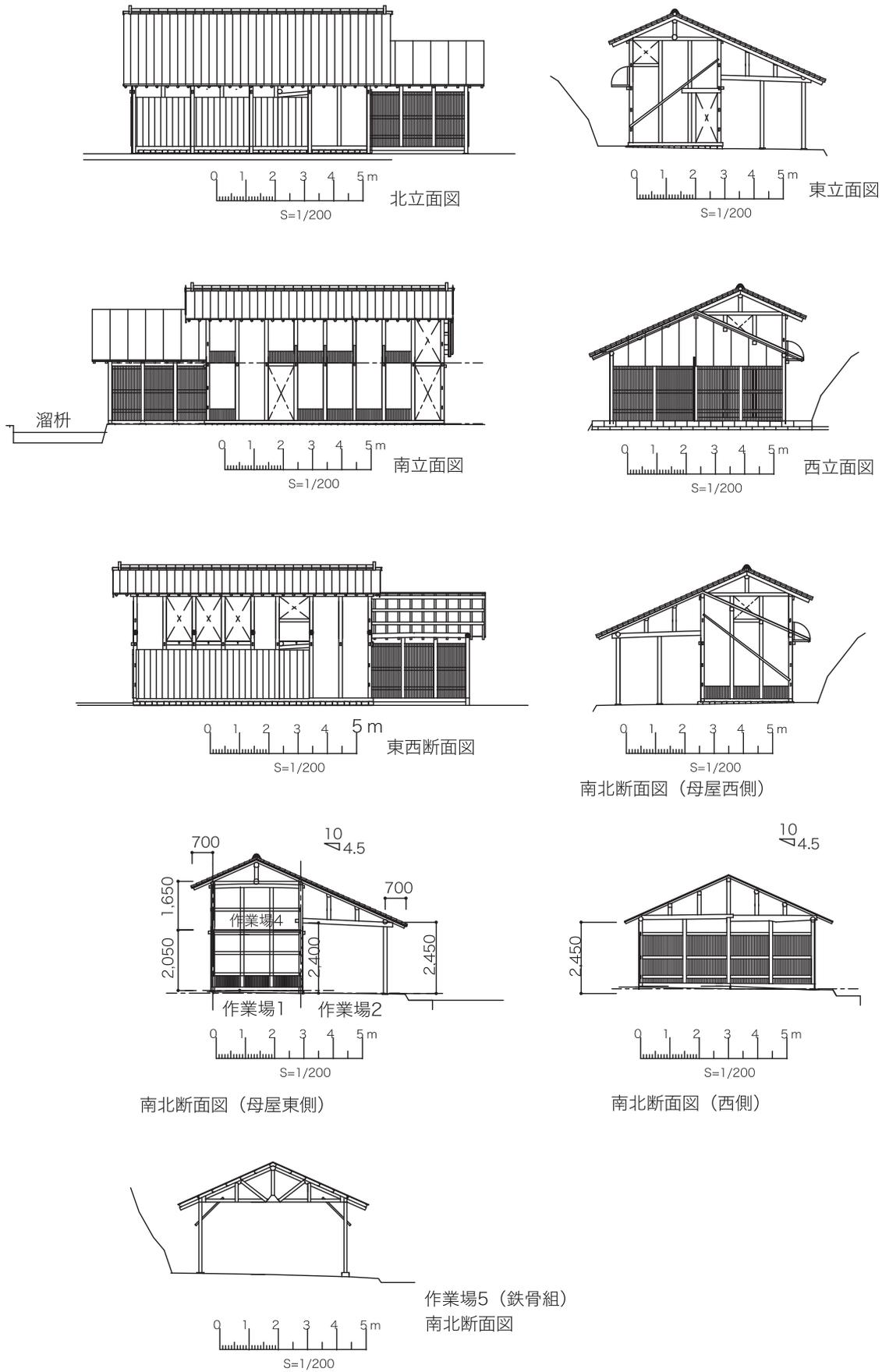


図8 乾燥小屋(2) S=1/200

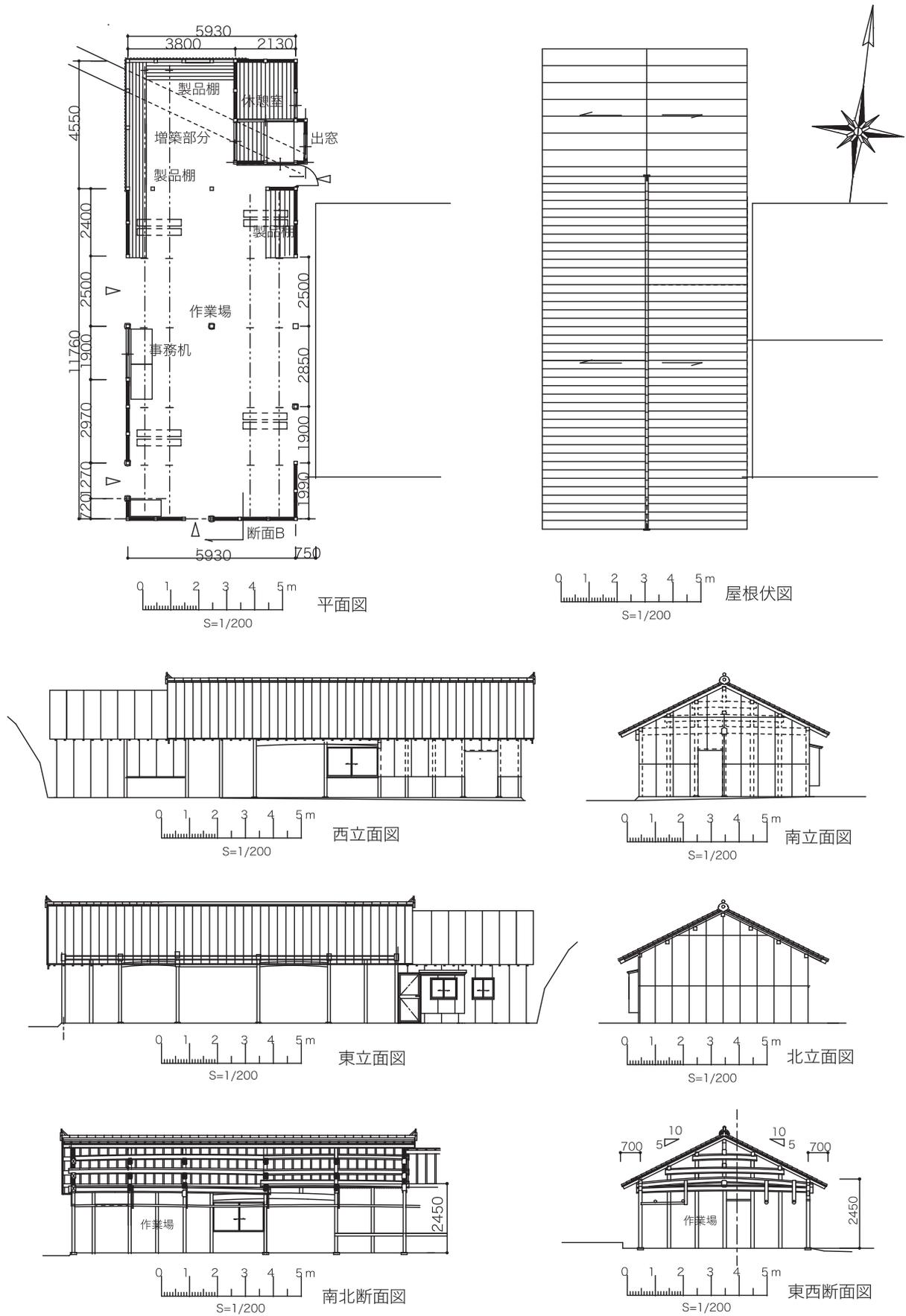
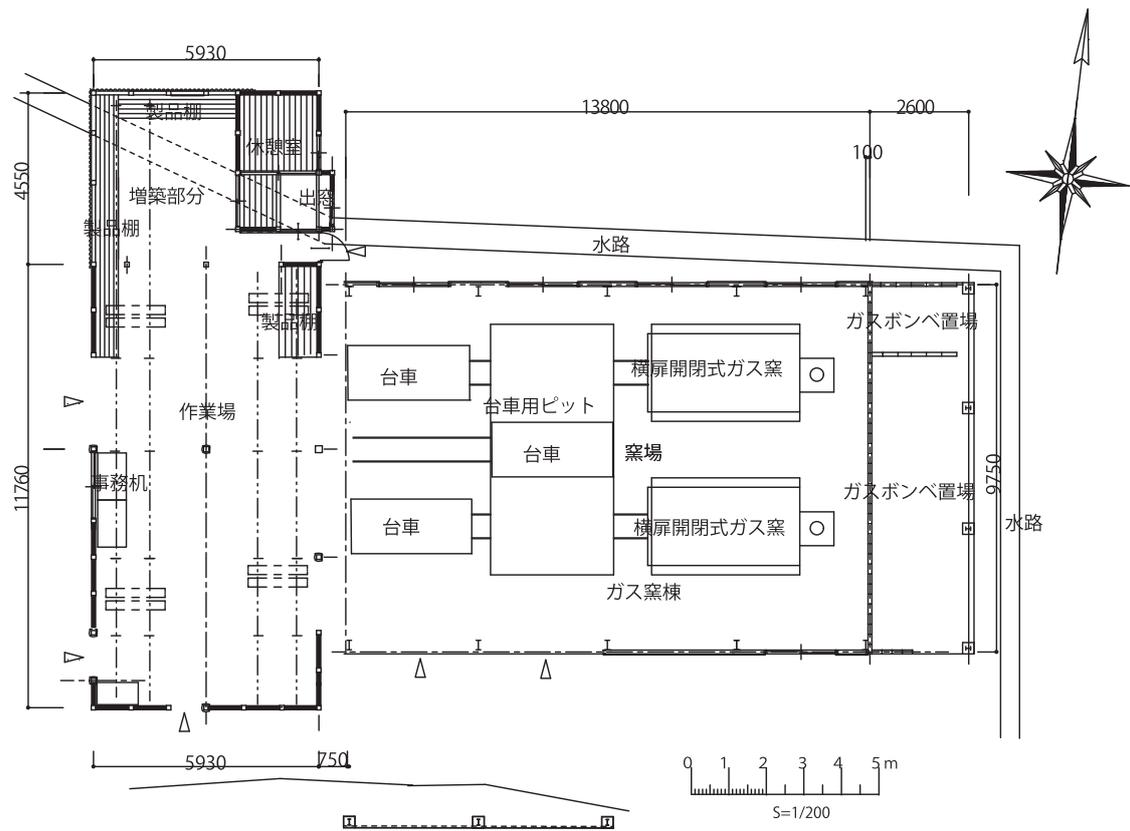
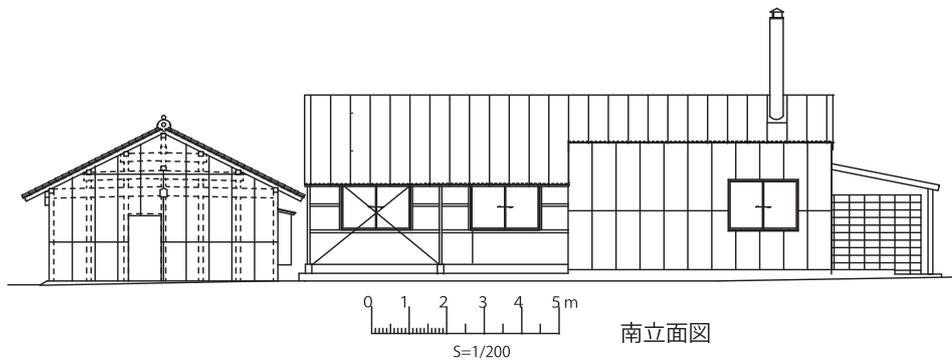


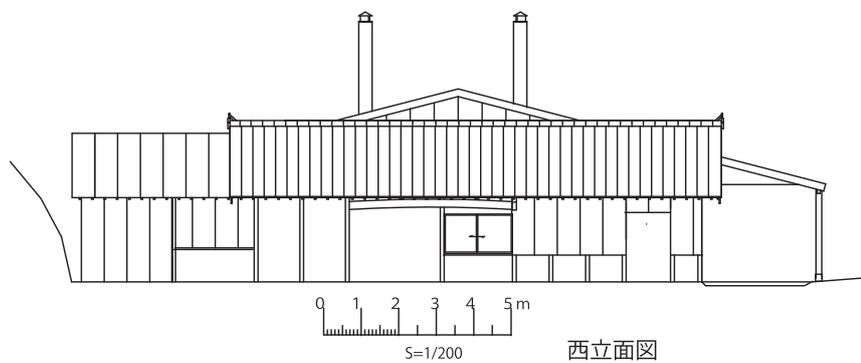
図9 作業場 S=1/200



平面図

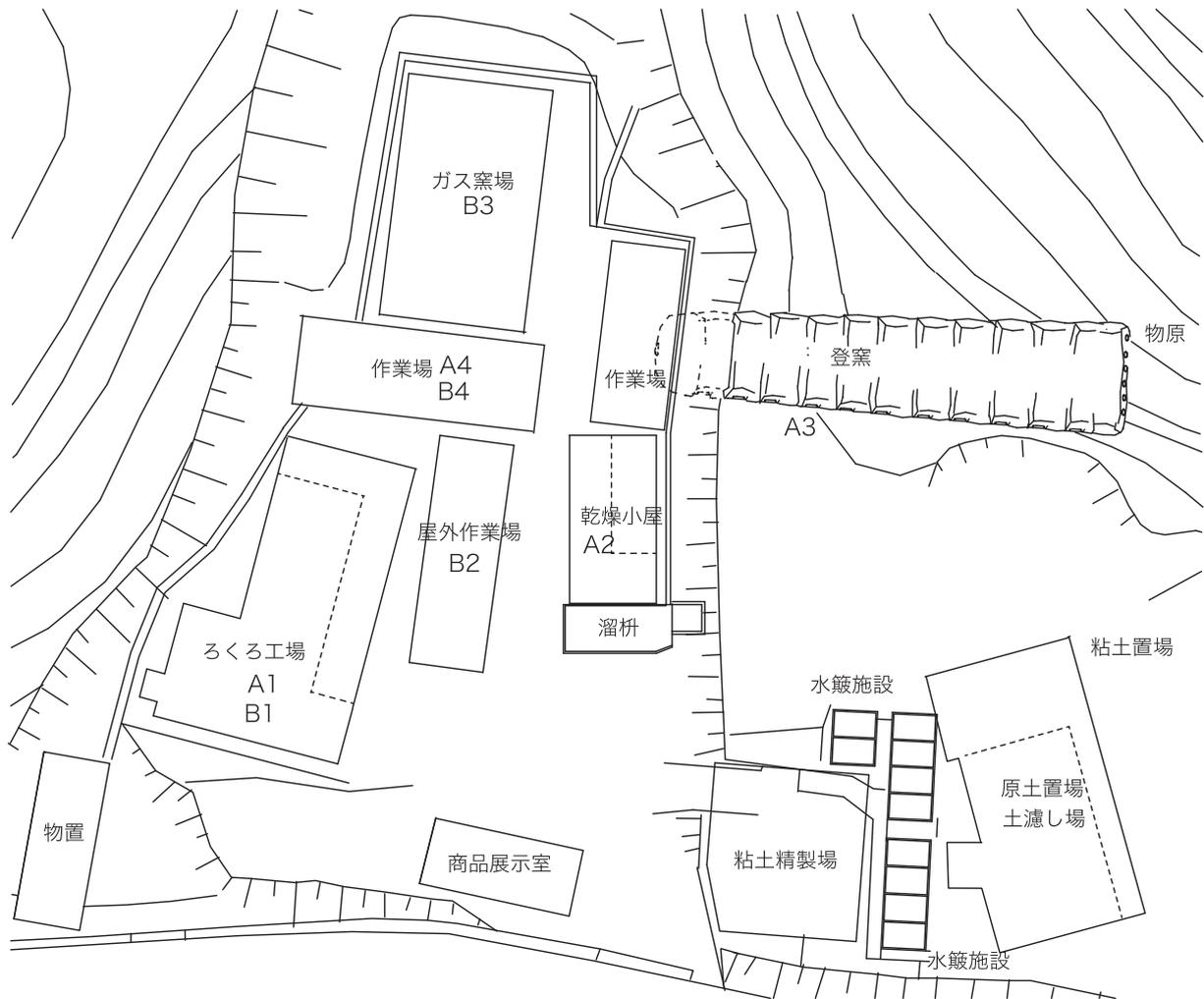


南立面図



西立面図

図10 作業場・ガス窯場 S=1/200



A：登窯期（昭和28～50年） B：ガス窯期（昭和51年以降）

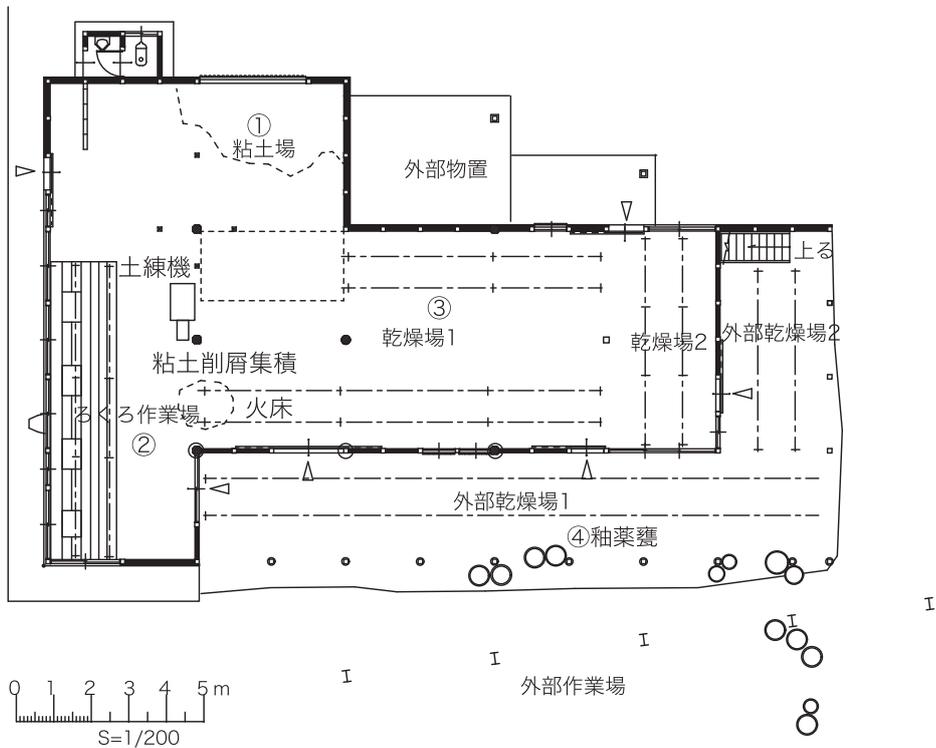


図11 建物配置と作業導線



ろくろ工場、屋外作業場



粘土精製場



屋外作業場、乾燥小屋、溜枡



乾燥小屋、作業場（奥）、ガス窯場（右）



ろくろ工場（奥）、屋外作業場、乾燥小屋



ガス窯場



ろくろ作業場の窓 (西壁)



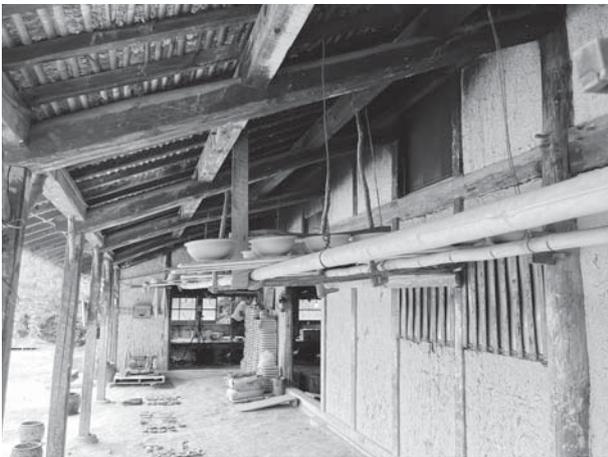
外部乾燥場 2 の窓 (東壁)



ろくろ作業場、外部乾燥場 1



外部乾燥場 1 と二階開口部



外部乾燥場 1 と乾燥棚 (西側)



外部乾燥場 1 と乾燥棚 (東側)

写真図版 2 ろくろ工場 (1)



外部乾燥場 1 の釉薬甕 (西側)



外部乾燥場 1 の釉薬甕 (東側)



乾燥場 2



粘土場



ろくろ作業場 (床中央が火床)



ろくろ作業場 (南側・左側に火床)

写真図版 3 ろくろ工場 (2)



ろくろ作業場 (南側)



ろくろ作業場 (東側・右側に土練機)



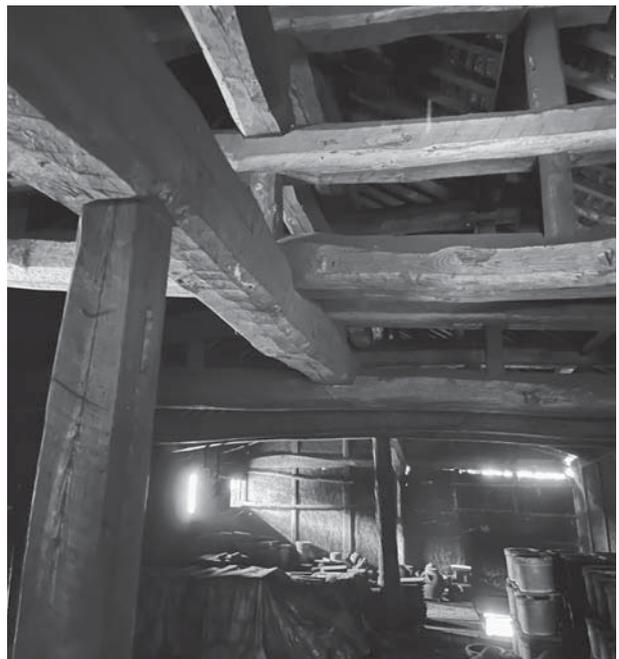
粘土場



粘土場 二階吹抜け部



二階物置 梁組 (東側)



二階物置 梁組 (西側)

写真図版4 ろくろ工場 (3)



二階物置 (西側)



二階物置 (東側)



二階物置 (東側)



二階物置 (右壁に一階外部乾燥場への扉)



乾燥小屋全景



作業場5 (鉄骨組)



作業場 2



1 階通気口



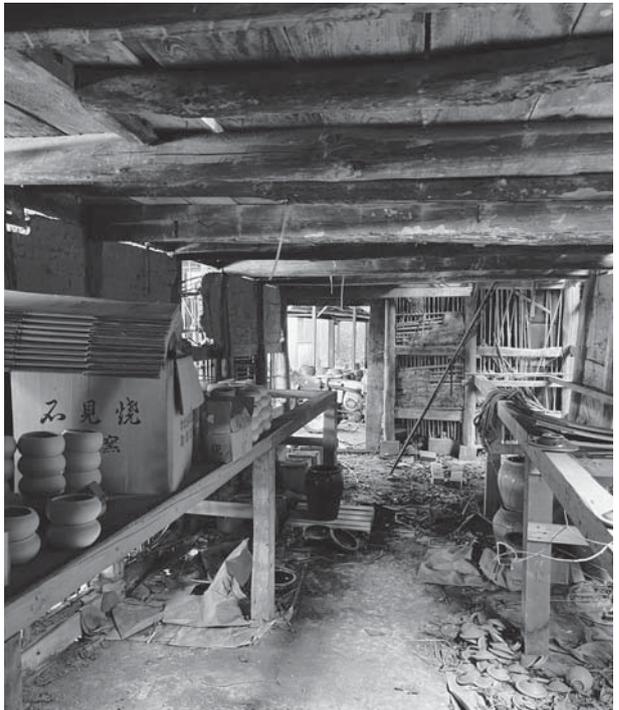
1 階作業場 2 側出入口



作業場 2



南側斜面 (左側上方に登窯)



1 階作業場 (東側)

写真図版 6 乾燥小屋 (2)



1 階作業場 (西側)



2 階作業場 3 側



作業場 2 屋根



連房式登窯部分 (6 房周辺)



作業場 南西側出入口



作業場 南側出入口

写真図版 7 乾燥小屋 (3)、連房式登窯、作業場 (1)



西面



ろくろ工場との接続部分 (トタン屋根)



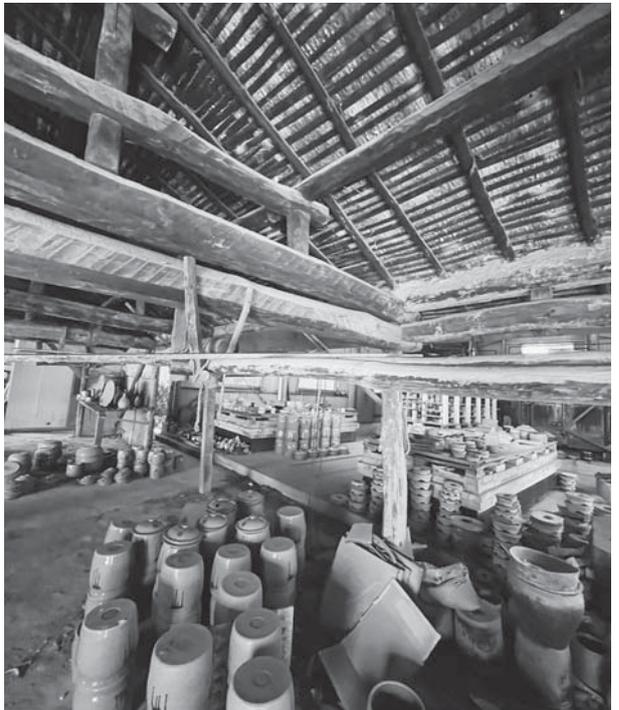
既存部分小屋組 (南側)



既存部分小屋組 (北側)



合せ梁部分



合せ梁 桁側部分ガス窯場側

写真図版 8 作業場 (2)